

六ノ七 笠置寺般若台供養願文

出典 讚仏乗抄第八（東大寺藏）

解説

貞慶の記す願文であり、貞慶入山前後に関する重要な史料である。

この願文に他の史料を付加して当時の般若台関係における貞慶の活動を記すと次の通りとなる。

- (一) 養和二年一月一日に大般若経六百卷の書写を発願し、同年十一月二十七日に書写を始め、建久三年十一月二十七日に完了した（笠置上人大般若理趣分奥日記、以下奥日記。笠置寺般若台供養願文、以下供養願文）
- (二) 建久四年秋、笠置寺に籠居（奥日記）
- (三) 黒漆六角経台一基を造立（奥日記、供養願文）
- (四) 建久六年十一月、板葺の六角三間の精舎一字を建立（供養願文）
- (五) 萱葺五間一面の僧房一字を造立（供養願文）

原文

敬白

奉書写大般若経一部六百卷

右人身仏教曠劫難感若貯^ハ一善以為得矣而発心修行興法

利生推其至要不如般若仍去養和二年正月一日敬発繕写

之願為除彼留難求仏天ノ加護上自一切三宝三国高祖下至

□□□□和光諸神自^ラ作^テ願文日々祈請請讚□□□□□□□□

同年十一月二十七日招^リ書生始写首題但名利未遁染淨

交縁空移春秋首尾十一箇年至建久三年十一月二十七日

全部終功手得神珠転読開講期末來際聊割一項永資施供

矣

奉造立黒漆六角経台一基扉ノ面ニ奉凶法涌菩薩常啼菩薩

阿難尊者玄奘三蔵梵王帝釈護世四王婆伽羅龍閻魔法王

像并十二躰中央奉安釈迦如来文殊弥勒二菩薩像各一躰

仏舎利十六粒

右読□□□竊作是念法宝可貴其儼如斯仏子等書写般若

莊嚴高台日常恭敬令人信仰宿志不空今僅得果抑此仏像

者伝聞古先帝之所造也大聖文殊自五台來刻彫開眼再示

靈異然未見緣起文誰因此像來^テ為^ラ此ノ主如來化機豈無由乎
木繪諸尊者仏子所願也各有深志不能具記仏舍利者弟子
殊所歸也願生々世々如影随從豫有夢想果而得之矣

奉建立板葺六角三間精舎一字

右正法欲久利益欲遠不堅其基豈全其事仍卜慈尊之靈崛
契留住於当山去年八月始上梁棟土木之構二年而終盖善
知識力也号之般若台令聞者称其名貽之濁惡世令近者結
其縁無量衆生預巨益矣

奉起（造が正しいか）立葺葺五間一面僧房一字矣

右方丈之室容身可足愍生之間何其當々今為住持敬造僧
舎敬奉供養十方衆僧於此有縁之人來而止住晨昏仕舍利
如彼沙弥□之因縁乞願満寺不捨修補破損矣

□□□□如右仏子幼年孤露無父無母只□□□以^テ□□□

恩門塵累葉聊守訓導須勵修学久報君師而身弱病重性忽浮
踈夢中生涯期何ノ前途幽隱之志朝而暮也然猶無堅固之道心
無堅固之執心矇々緩々四旬徒闌及于頃年過属休閑伏願当
初竊有啓春日大神願生々世々加護我仏道即転般若理趣分
其後自然企写経事大功將終之比一百日ノ間屢詣社壇其年之
春漸遁世累次歳之秋永以蟄居誠知法力也神徳也未代誰謂
空哉但草菴未鑠^サ秋ノ霧空門還交夜ノ塵其所ハ拘則此経ノ一切
與権現ノ冥慮而已、彼常啼壳身供養般若市ノ中ニ都無買我之者
須建□令起立精舎壇上誰有投塊之伴独願微力□□冥衆

風雲感会得一ッ施主其力稍及助太半遂巖下ニ開基山中ニ択材
知與不知遠近同志莫大之功不期而成箇中ニ大木者当山賀州
專抽其誠穀帛者両三ノ知識殊施其資法器道具ハ本寺ノ両大和
尚已下同門各垂芳情凡厥淺深多少之縁唯仏所照不可自
述方今絵蓋幢幡花瓶香炉一々ノ莊嚴随分弁備以粧^ニ宝之

台以排六度之樞無數大衆其前ニ雲集権僧正^{注一}禪下手ニ捧香炉
具述志趣十口声々ニ各唱題名聞者毛豎合唱発願嗚呼首題
降墨之始我不^キ知何日何時成就此事梵宇飛甍之今又不知
注一・右に「覺憲願主叔父也」

何劫何生漸萌此願又不知此結緣人昔有何因緣隨喜之淚不
覺而下願是レ我願我勸人功ハ是人ノ功人助我善知識者是已因
緣將來亦如此歟但事大誠少名與実乖凡夫所作是非相兼
伏願久遠劫來若於三宝有植一善宿因開發與今和合洗妄
瑩眞功不唐捐皆融會畢竟空ニ共ニ流入無相海三輪清淨ニシテ一縁無
朽依般若ノ力成就万善積尊一代此法住持代テ我守国土守佛法
代テ我救法縁救恩愛又願命終之時決定加護遠離□□上生兜
卒慈尊加披シテ引攝結縁隨応令生十方ノ仏土彼人昇進還テ救弟子
又願弥勒下生シテ説般若時此諸大衆共ニ詣仏所如來分身放六十
百千俱服那庚多光明于競沙界諸仏証明無量衆生引發來
詣如斯一々ノ儀式会々法輪互見互聞發心得記設若此中漏在
世益弥勒遺法未滅之前三乘中決定令發不退心又願以此
伽藍永奉施伊勢大神宮八幡大菩薩春日大神金峯藏王
当山護法如守眼精勿令失墜乃至法界共成仏道焉敬白

建久六年十一月十九日 沙門積貞慶 敬白

読み下し文

内容は難しいが敢えて読み下しを試みた。一例として参考にして欲しい。

敬白

大般若経一部六百卷書写し奉る

右、人身に仏教は眩劫（永劫）にして感じ難しも、若し一善を貯へば以て得ると為す。而して発心修行は興法利生（仏が衆生を救うこと）なり。推おしはかるに 其の至要（極めて重要なこと）なるは般若（最高の真理を認識する智慧）にしかず。

仍つて去る養和二年正月一日、敬つて繕写（浄書すること）の願を發す。彼の留難（修行を妨げる障害）を除き仏天の加護を求めんが為なり。上は一切の三宝、三国の高祖より、下は□□□□、和光の諸神に至り、自ら願文を作りて日々祈請し、□□□□□□□讚を請う。

同年十一月二十七日、一リの書生を招き、始めて首題（経の題目）を写す。但し名利（世間的な名声と現世的な利益を欲すること）未だ染浄するを遁れず、交縁空しく春秋を移し、首尾十箇年、建久三年十一月二十七日に至り全部終わって功とす（注二）。手に神珠を得て、転読、開講し未来際（未来のはて、即、永久にの意）を期し、聊か一項を割き、永く施供を資す。

黒漆六角経台一基を造立し奉る。

扉の面に法涌菩薩、常啼菩薩、阿難尊者、玄奘三蔵、梵王帝釈、護世四王、婆伽羅龍、閻魔法王像并に十二体を図き奉り、中央に釈迦如来、文殊弥勒二菩薩像各一体、仏舍利十六粒を安んじ奉る(注二)。右□□□を読み、竊かに是の念を作す。法宝(仏の説いた真実の教えを宝に例える) 貴ぶべし。其の儼(厳かなるさま)なること斯の如し。仏子等般若(大般若経六百卷)を書写、高台を莊嚴し日常恭敬して人をして信仰せしめん。宿志(かねての願い) 空しからずして、今僅かに果を得る。

抑も此の仏像は古の先帝の造る所と伝聞する也。大聖文殊、五台(五台山、中国の靈山で文殊菩薩の聖地)自り来たりて刻彫開眼し再び靈異を示す。然れば未だ縁起の文を見ざるも、誰か此の像を図し、来たりて此の主と為らん。如来の化機(仏が衆生を教導し、感化する方法) 豈由無しとせんや。

木絵の諸尊は仏子(仏弟子貞慶)の所願するところ也。各深き志有り、具記すること能はず。仏舍利は弟子(貞慶)の殊に所帰(帰依するところ)するところ也。願いは生々世々、影の如くに随従す。予め夢想有り、果して之を得んや。

板葺六角三間の精舎一字を建立し奉る。

右正法(仏の教え) 久しきを欲し、利益(仏の与える恵み) 遠きを欲すも、其の基い堅からず。豈其の事全うせんや。仍つて慈尊の靈崛を卜し、契りて住まいを当山に留む。

去年八月始めて梁棟を上げ、土木の構えを二年にして終える。盖し善知識(人を仏道に導く機縁や機会となるもの)の力による也。之を号して般若台とし、聞く者をして其の名を称しめ、之を濁悪の世に貽せ、近き者をして其の縁を結ばしめ、無量の衆生も巨益に預からしめん。

萱葺五間一面の僧房一字を起(造) 立し奉る。

右、方丈の室、身を容れるに足る可(ばかり) 愍(なまじい)の生の間、何ぞ其の営々(あくせく働くさま)たる。今住持と為りて敬つて僧舎を造り、敬つて十方の衆僧に供養し奉る。此に於いて有縁の人来たりて止住し、晨昏(朝夕) 舍利に仕えるは、彼の沙弥□の因縁の如し。乞い願はくは満寺修(手入れ) 捨らず破損を補(修理する) すること。

□□□□□□右の如し。仏子幼年より孤露(頼りのない身の上)にして、父無く母無し。只□□□□、□□の恩を以て門塵累葉(代々)、聊か訓導を守り、須く修学に励みて久しく君師に報ず。而して身弱くして病重し。性忽ち浮躁(浮躁―軽々しくて大雑把なること)、夢中(本心を失ったさま)の生涯何の前途をか期す。幽隱の志、朝に暮れ也。然れども猶、堅固の道心無く、堅固の執心も無し。矇々緩々四旬徒らに闕せ、ここに及びて頃年(近年) 属(まよ)に休閑(ひまなご)に過ぐ。

伏して顧りみるに当初より窃かに春日大神に啓すこと有り、願はくは生々世々我が仏道を加護せんことを。即ち般若理趣分（大般若波羅密多經の中の一部の經典）を転じ、其の後、自然に写經の事を企つ。大功將に之を終えんとするの比（注二）一百日の間、屢社壇（春日大社）に詣ず。其年の春、漸く世累（世のわずらい）を遁れ、次歳の秋、永く以て蟄居す。誠に法力を知る也。神徳也。末代誰か空しと謂うや。但し、草庵未だ秋の霧を鎖（鎖）さず、空しく門還て夜の塵と交る。其の所は則ち此の經の一切と権現の冥慮に拘わるのみ。

彼の常啼（注三）身を売りて般若を供養せんとするも、市の中に都て我を買う者無く、須く□を建て、精舎を起立せしむ。壇上誰か投塊の伴有りや。独り微力を顧りみて□□冥衆、風雲感会（真意を見抜くこと）し、一施主を得る。其の力、稍（ようやく）助（力を貸すこと）の大半に及び、遂に巖下に基を開き山中に材を拵ぶ。知ると知らざるも、遠近志を同じくし、莫大の功、期せずして成る。箇の中、大木は当山、賀州（伊賀国）専ら其の誠を抽し、穀帛は両三（二つ三つ）の知識、殊に其の資を施す。法器道具は本寺（興福寺）の兩大和尚已下、同門各芳情を垂る。凡そ浅深、多少の縁を厥くも、唯仏の照らす所自ら述べるべからず。

方今、絵蓋、幢幡、花瓶、香炉、一々の莊嚴（仏堂等を嚴かに飾りつけること）随分（ひとかたならず）に弁備（予めよく調べて準備すること）し、以て三宝の台を粧い、以て六度の枢（開き戸を開閉する軸となるところ）を排く。無数の大衆、其の前に雲集し、権僧正（原注 覺憲願主叔父也）禪下、手に香炉を捧げ、具に志趣（心の向かうところ）を述べ、十口の声々、各題名を唱す。聞く者、毛豎（かるくみじかく）合唱し発願す。

嗚呼首題（經の題目）降墨の始め（注四）我、何日何時に此の事を成就するかを知らず、梵宇（寺院）飛甍（瓦葺きの高い建物）の今、又何劫、何生に此の願の漸萌（だんだんと萌してきたこと）せるかを知らず。又此の結縁せる人、昔、何の因縁有りしかを知らず。随喜の涙不覺にして下る。願いは、是れ我が願いを我れ人に勧めんこと。功は是れ人の功にして、人、我を助く。善知識は是、已に因縁あり。将来も亦此の如しか。但し事、大にして誠は少なし。名と実は乖い、凡夫の所作は是相兼ねるに非ず。伏して久遠の劫の來たるを願う。

若し三宝に於いて一善の宿因（前世になした業で、この世での善悪の因となるもの）を開発することあらば、與に今和合し、妄を洗いて眞を瑩かん。功、唐捐（むなしく捨てること）せず。皆畢竟空に融会し、共に無相（姿、形が無いこと）の海に流入せん。三輪（世界を支えている三つの輪。風輪、水輪、金輪）清浄にして一縁朽ちること無く、般若の力に依り万善を成就す。釈尊の一代此の法を住持し、我に代りて国土を守り佛法を守り、我に代りて法縁を救い恩愛を救はん。又願はくば、命終わるの時、加護を決定（信じて疑わないこと）し、□□を遠離（遠くへ離すこと）、兜卒に上生し、慈尊加披（仏が慈悲の力を加えて衆生を助け護ること）して引摂（衆生を極樂へ導くこと）結縁（仏道に縁を結ぶこと）、随応して十方の仏土に生れしめ、彼の人（慈尊）



笠置寺所蔵の十六善神図。九月大般若経転読法要の時、祭壇正面に掲げられる（藩主高猷寄進）

昇り進み、還りて弟子を救はんことを。又願はくば、弥勒下生して般若を説く時、此の諸の大衆、共に仏所に詣でんことを。如来は分身六十百千を放ち、俱に那庚多（数の単位、極めて大きな数量、普通一千億）の光明に服し、沙界に競う。諸仏無量の衆生を証明し、引発し來りて詣でること斯くの如し。

一々の儀式、会々の法輪（仏の説法）、互いに見、互いに聞きて発心して記を得る。設（たとえ）、若し此の中に在世の益に漏れるとも、弥勒の遺法、未だ滅せざる前、三乗の中に決定し、不退心を発せしむ。

又願はくは此の伽藍を以て、永く伊勢大神宮、八幡大菩薩、春日大神、金峯蔵王、当山護法に奉施し、如守、眼精（物事をはっきり見極める力）失墜せしむなかれ。乃至法界共に成仏道を。敬白

建久六年（一一九五年）十一月十九日 沙門積貞慶 敬白

注一 養和二年一月一日に大般若経六百卷の書写を發願し、同年十一月二十七日に書写を始め、建久三年十一月二十七日に完了した。

注二 大般若転読法会の際には「十六善神」の掛け軸を本尊として掲げる。この「十六善神」の掛け軸は六角九重の台座上に、釈迦如来、象に乗れる普賢菩薩、獅子に乗れる文殊菩薩の釈迦三尊を描き、普賢菩薩の下に僧形の法涌菩薩、文殊菩薩の下に常啼菩薩を描く。そしてこれらを取り囲むように武裝形の十六善神が描かれ、画面最下方に経卷を収めた笈を負う玄奘三蔵、深沙大將が配される。醜惡な姿の十六善神は佛の教えを聴いて改心し、善心をおこして三宝に帰依し、般若の教えを守護する誓願をおこしたので、これらの神々は「般若守護の善神」とされるのである。常啼菩薩は求法の旅の末に法涌菩薩に巡り会い般若の教えを受けたといわれる。

注三 般若波羅密を求め、その切実な心から泣きながら師を探し求め、遂に法涌菩薩から教えを受けたと

言う。師を供養するため身を売ったという求道物語の主。

注四 養和二年十一月二十七日に大般若経六百卷の書写を始めたころ

注五 般若台が整備された現在